The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞田中勝則『ブラジル音楽歴史物語』ミュージック・マガジン、2025年、522頁
Author(s)	伊藤, 秋仁
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2025, 51, p. 86-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

田中勝則『ブラジル音楽歴史物語』ミュージック・マガジン、2025 年、522 頁

社会を映す鏡としてのポピュラー音楽

伊藤 秋仁

音楽がブラジル社会にいかに深く浸透し根付いているかは、多少なりともブラジルに関わった人なら実感しているだろう。ポピュラー音楽が、その国の歴史と呼応し、社会の姿を映し出すという現象は、米国を例に挙げると理解しやすい。奴隷制度とブルースや黒人霊歌、大恐慌とフォークソング、公民権運動とソウルやゴスペル、ベトナム戦争とロック、現代の都市問題とヒップホップ―いずれも、特定の社会階層や地域から生まれた音楽が、やがてメインストリームへと広がっていった。

逆説的になるが音楽やその背景を辿ることで、社会や現代史をよりよく理解できる。そしてブラジル音楽もその例外ではない。むしろ、これほど音楽と歴史、社会がダイナミックに結びついている国は、ほかに類を見ないのではないだろうか。

そのような背景もあるのであろう。ブラジルのポピュラーミュージックに関する研究は非常に盛んである。日本においても、ルイ・カストロの名著『ボサノヴァの歴史』をはじめ、トロピカリア運動に関する研究書や、主要なミュージシャンの自伝・評伝などが次々と翻訳されており、ブラジルにおける音楽研究の熱気の一端を垣間見ることができる。

著者について

日本でのブラジル音楽の人気は、1960 年、映画『黒いオルフェ』が日本で公開されたあたりから始まるのであろうか。カーニバル、サンバ、ボサノヴァといったブラジルのイメージが日本社会に膾炙し、

多くの日本人を魅了してきた。本書の著者、田中勝則氏もおそらくはそのようなブラジル音楽愛好家の一人であったに違いない。ただし、その歩みは日本のどのブラジル音楽愛好家とも異なっている。

ブラジルが混乱の極みにあった 1980 年代後半、田中氏は単身ブラジルに渡り、当時ほとんど顧慮されていなかった、サンバの創成期を支えた重要なサンビスタたちとよしみを結んだ。そして自ら資金調達し、プロデューサーとして彼らのアルバムを制作し、再び彼らに脚光を当てたのだ。

キューバ音楽で同様の仕事を成し遂げたライ・クーダーほど知名度こそないものの、田中氏の功績はそれに勝るとも劣らない。2000 年にはマリーザ・モンチもポルテーラのヴェーリャ・グァルダ（古老サンビスタ）たちとアルバムを制作したが、その頃には多くのサンビスタたちが鬼籍に入っていた。それに先んじて、彼らの存命中にアルバムを世に送り出した田中氏の貢献は、日本のみならずブラジルでも高く評価されている。

その後、田中氏は、インドネシアやアジア各地の音楽も手掛け、活躍の幅を広げるとともに、いわゆるワールドミュージックの世界的な評価の高まりにも大きく貢献した。

本書の構成

本書は、序章「『最初のサンバ』から始まって」で幕を開け、ブラジルの国民音楽とされるサンバの誕生とその後の展開を概観する。

第 1 章「植民地時代のブラジル」では、大航海時代にポルトガル人が世界に蒔いた音楽の種や、奴隷制期のブラジル、特に北東部におけるアフリカ的要素に焦点を当てる。

第 2 章「モジーニャとショーロ」では、金の時代のミナス・ジェライス州や金の搬出港として発展し新首都となったリオデジャネイロを背景に、17 世紀半ば 18 世紀にかけて誕生したとされるモジーニャ（ファドとの共通性も示唆される）や、アフリカ的を要素も加えたルンドゥー、さらに 1808 年のポルトガル王室のリオ移転、大衆歌謡とクラシックの流行、そしてショーロの誕生と発展が描かれる。

第 3 章「ポピュラー音楽の誕生」の舞台は 20 世紀初頭のリオデジャネイロ。レコード時代の到来とサンバの誕生、カーニバル、万国博

覧会、サンパウロの近代芸術週間、ブラジル音楽の巨人ピシンギーニャの登場とジャズの影響について語られる。

第 4 章「サンバの黄金期」では、ラジオ時代に人気を博したスターたちや、サンバの多様化、最も重要なサンビスタの一人であるノエル・ローザと、後にアメリカでも人気を博したカルメン・ミランダの登場が紹介される。

第 5 章「『新国家』時代のブラジル音楽」ではヴァルガス政権下で巨大化していったエスコーラ・デ・サンバ(サンバのコミュニティ)、ブラジル的なテーマに沿って作られるサンバ・エンレードといった「創造された伝統」、アリ・バローゾの「愛国サンバ」や、ドリヴァル・カイミの登場などが描かれる。

第 6 章「ブラジル音楽の転換期」では、サンパウロで人気を博すようになったセルタネージャや、ルイス・ゴンザーガの登場が語られる。

第 7 章「サンバ・カンソーンのモダン化」では、コパカバーナで生まれた新しいナイトライフと、華やかな女性歌手たちの活躍、アントニオ・カルロス・ジョビンの登場、映画『黒いオルフェ』の海外でのヒットなどが取り上げられる。

第 8 章「ボサ・ノーヴァの誕生」では、世界を席巻したブラジルサッカーとジョアン・ジルベルトの登場とボサノヴァの世界進出が描かれる。

第 9 章「MPB の青春時代」は軍事政権下の時代が舞台。MPB を牽引したナラ・レオン、テレビ局が主催した音楽フェスティバルから登場したエリス・レジーナ、シコ・ブアルケ、ロベルト・カルロス、ジョルジ・ベン、そしてトロピカリア運動、軍政令第 5 号と海外亡命の問題が語られる。

第 10 章「サンバの復興」では、1950 年代に黄金期を迎えたエスコーラ・デ・サンバと対照的に、不遇をかこった創成期の古老サンビスタたちの復活、カルトーラの再評価、パウリーニョ・ダ・ヴィオラの成功が描かれる。

第 11 章「ブラック・ミュージックの躍動」では、現代サンバを牽引したマルチーニョ・ダ・ヴィラ、ブラジリアン・ソウルやブラジル人音楽家たちのアフリカへの回帰が語られる。

第 12 章「MPB の成熟」では、1970 年代前半の「ブラジルの奇跡」

と呼ばれた好景気を背景にしたブラジル音楽の多様化、レゲエの流行、ベッチ・カルヴァーリョ、クララ・ヌネス、マリア・ベターニア、ガル・コスタら、優れた女性歌手たちの活躍が描かれる。

第 13 章「長かった軍事政権が終わって」では、国産ロックの登場、バイーア音楽の新世代、ジルベルト・ジル、カエターノ・ヴェローゾの活躍が紹介される。

第 14 章「ポスト・モダンの時代のブラジル音楽」では、新世代のサンバであるパゴージ、セルタネージャの隆盛、リオで生まれたヒップホップ、バイリ・ファンクの流行、マリーザ・モンチなどの MPB の新世代の女性歌手たちの活躍が言及される。

終章「『無中心』の時代のサンバとショーロ」は作者自身がかかわった古老サンビスタたちの再評価やショーロの復興などが語られる。最後は「ブラジルは音楽研究の先進国」という節で締められる。

ポピュラー音楽研究の重要性

著者は次のように述べている。「この国の音楽の通史が日本で発表されるのは、おそらくこれがはじめて。そこで書き方としては、ブラジルの歴史をたどりながら、それぞれの時代にどのような音楽が誕生し親しまれたかを、丹念に追いかける手法を取った。」[1]

日本で初めてのブラジル音楽の通史が、広範な音楽知識と現地経験を持つ著者によって書かれた意義は極めて大きい。田中氏の仕事は、今後のブラジルの近現代史の研究おいて重要な礎となるだろう。そこで紹介された音楽に実際に触れ、その背景を探ることで、歴史や社会の理解が格段に深まるに違いない。

また、著者はこうも記している。「ブラジルという『国』の音楽を紹介するにあたっては確固たる中心軸は必要だ。それがサンバであることに異論を持つ人はいないだろう。他の音楽とは違って、サンバはブラジルの『国民音楽』であり、長い間ブラジル人のアイデンティティであり続けた。なので、この本でも話の中心軸は常にサンバに置かれている。」[2]田中氏のこの認識は、確かにブラジル音楽史を語る

---

[1] 『ブラジル音楽歴史物語』、506 頁。

[2] 同書、507 頁。

うえで、ごく自然なものだろう。しかし、評者としては「その言い切り方」にわずかなためらいを覚える。おそらくそれは、評者がこれまでブラジルにおける人種をめぐる言説を批評的に読み解き、人種民主主義の神話を相対化する作業を重ねてきたにほかならない。

古老のサンビスタに向けられた著者の敬意には、評者も深く共感する。しかし同時に、なぜ彼らのような音楽的偉人たちが、長らく社会の周縁に追いやられ、不遇を強いられてきたのかという疑問は、看過できるものではない。著者はヴァルガス政権下の音楽制作に対し、比較的好意的な視点を示しているが[3]、まさにそのようなサンビスタたちこそが人種民主主義の神話の被害者にほかならないのでないかと思われるのである。

その意味で、現代のファヴェーラの若者たちがラップなど新たな音楽を通じて発する怒りの声[4]は、ジャンルこそ異なれど、サンバと地続きにある表現として捉えるべきなのではないのだろうか。

終章の最終節「ブラジルは音楽研究の先進国」の中で著者は次のように語っている。「ブラジルはもともと自国の音楽研究の分野ではラテン・アメリカでもズバ抜けて進んだ国だった。80 年代にはリオの国立芸術財団の主催で『ブラジル音楽研究家の集い（Encontro dos Pesquisadores de MPB）』という催しがあったが、（…）会場に溢れんばかりの研究家たちが熱気あふれる議論を戦わせているのを目の当たりにして驚かされたことがあった。」[5]実際、ブラジル音楽は語り尽くせぬほどのテーマを秘めた研究の宝庫である。ブラジル国内で出版される書籍はもとより、世界中の研究者や愛好家による膨大

---

[3] 同書、143 頁にて、著者は 1983 年にシコ・ブアルキとエドゥ・ロボの作品「ジェトゥリオ博士」（原題：Doutor Getúlio）の歌詞を紹介している。

[4] 評者が本学会誌『ANAIS』50 号（2024 年）で書評を投稿した黒人作家ジェフェルソン・テノリオは、ヒップホップ系のミュージシャンたち、とくにラシオナイス MC's のマノ・ブラウンやクリオーロ、エミシーダのファンだと公言しており、自身の作品のテーマやスタイルに彼らからの影響が見られる。なお、評者は同書評にてテノリオの『肌の裏側』（Jeferson Tenório, *O avesso da pele*, Companhia das Letras, 2020）を 2024 年度に出版予定である旨、記載したが、版権の問題が解決せず出版できないでいることをお知らせする。

[5] 『ブラジル音楽歴史物語』、489 頁。

な数の研究や論考がインターネット上にも存在する。その豊かさゆえに、評者自身も思わず著者の切り口に異を唱えたくなる場面があったが、それもまた、ブラジル音楽が多くの研究者をそれぞれ異なる方向へと誘い続ける、尽きることのない魅力を備えている証と言えるだろう。

数多くの優れたミュージシャンを輩出してきたブラジル音楽の全体像を把握するのはきわめて困難である。地理的にも歴史的にも、あまりに広大かつ多様だからだ。これまでにもディスクガイド的な書籍は何冊も出版されており、愛好家たちは様々なジャンルのブラジル音楽を愛聴してきた。しかし、音楽そのものの魅力は理解できても、その背景にまで目を向け、深く理解することは決して容易ではない。評者自身も、ブラジル文化に親しんできたとはいえ、音楽に関する知識は、限られた書籍や雑誌から得られた断片的なものにすぎなかった。

本書は、そのようなブラジル文化の研究者や愛好家にとって、まさに教科書と呼ぶにふさわしい一冊である。評者自身も様々なことを学んだ。そもそも 500 頁を超える大著であるのに、読み終えたときには、むしろさらに深く知りたくなる衝動に駆られる。それだけでも、本書の価値は十分に証明されていると言えるだろう。これ以上のものを望むのは、さすがにないものねだりであろう。まずは、このような書籍を出版してくれた著者と出版社に素直に感謝を伝えたい。

ただ一つ気がかりな点がある。それは、本書はいわゆる書籍ではなく、雑誌扱い（『レコード・コレクターズ 3 月増刊号』）として刊行されていることである。実際、インターネット書店で、「本」のカテゴリーから検索したところ、本書がヒットせず、頭をかしげた。「すべて」のカテゴリーでようやく見つけることができたが、内容の充実ぶりを考えると、雑誌扱いであることに違和感を覚えずにはいられない。

本書はブラジルの音楽の愛好家はもちろん、研究者にとっても貴重な資料になりうる内容を備えており、時間がたっても十分に参照に耐える価値がある。雑誌扱いであるがゆえに、いずれ流通が限られ、入手が難しくなるのではないかと懸念している。